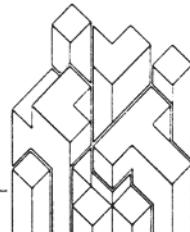




いじめ



目次

特集●いじめとケンカ	深谷和子	2
調査レポート●いじめ	深谷和子	8
調査を実施して		8
本報告書の要約		9
第Ⅰ章 クラスの中の「いじめ」		12
1. いじめの出現率		12
2. いじめのかたち		15
3. いじめは深く静かに		22
4. ケースを追って		23
第Ⅱ章 いじめられ体験を追って		25
1. いじめられ体験の有無		25
2. いじめる者の正体		28
3. 不合理ないじめの理由		30
4. どのようにいじめられたか		33
5. 口をつぐむ被害者たち		34
6. 周囲はどう対応したか		36
7. なすすべもなく時は流れて		40
8. あとに何が残ったか		41
第Ⅲ章 「いじめ」をどう見るか		43
1. いじめられやすい子のタイプ		43
2. いじめをどう見るか		47
3. いじめをどうしたら		52
第Ⅳ章 提言——「いじめ」解消の手がかりを求めて——		53
資料1 調査票見本		56
資料2 学年・性別集計表		66

特 集



いじめとケンカ

東京学芸大学助教授 深谷和子



どの社会にもある「いじめ」

子どもの世界で「いじめ」が流行しているとのニュースは、今年に入っておとなちの間にショックをひき起こした。関連行政が指導の手びきを出したり、いじめの相談月間を設け、公開講座や講演会を次々と開催したのも異例なら、心理や教育学関係の学会が次々

とシンポジウムを開いたのも、かつてないことだった。おとなちの狼狽ぶりがよくわかる。

しかし考えてみるとこの問題は、例によつて、いささか軽率なマスコミによって火をつけられあおりたてられはしたもの、何も今に始まつたことではない。この数年来、教育関係者やまた親たちの間で、ひそかに案じら

れていたことだった。このレポートの姉妹編ともいるべき、『モノグラフ・小学生ナウ』（福武書店より毎月刊行）でも、筆者と中原によって昭和58年末に調査が行われ、翌59年5月号（vol. 4-2）に「いじめ」のテーマで刊行されている。この時点ですでに小学校高学年では、ほぼ5割のクラスに大なり小なり「いじめ」が発生していることが推定されている。

さらに視野を拡げて考えれば、この問題は、何も子どもの世界に限って起こっていることではなく、また現代に限ったものでもない。おとの世界には、今も昔も、さまざまな形のいじめやそれに類することがあるではないか。たとえば、姑の「嫁いびり」。これなどはもっとも古典的で、永続している「いじめ」の代表例だろうし、古典的といえば「村八分」もある。「嫁いびり」にしろ「村八分」にしろ、そうした用語が定着しているくらいだから、何も今ごろことさら騒ぎたてなくとも、いじめは人類の歴史と共にあった行為なのであろう。

現代においても、新しい形のいじめがある。企業における「窓際族」や理不尽な「左遷」、また見方によっては、新入社員の採用に当たって大企業が行っている「指定校制度」だってその例かもしれない。しかし子どもの世界におけるいじめが、陰湿だといわれるわりには、むき出しで単純なパターンをとるのに対

して、おとな社会のいじめは、それとわからない形、つまり上品でソフィスティケイトされた形で行われることも多い。たとえば昭和59年末の紅白歌合戦で、ミヤコをミソラと言い違えた生方恵一アナウンサー（元NHK）の大坂（局次長）への転勤は、形としてはどう見ても栄転だが、病後の奥さんや、結婚を目前にした娘さん、受験をひかえた息子さんなどの家族問題を考えると、あれこそ一種のくぐもった「いじめ」ではないかと、週刊誌の記事は物言いたげに反応している。しかしこれがいじめかどうかは、永久に蔽の中なのだろう。

このように見てくると、一部の非行グループや暴力団などの内部で行われるリンチ、国と国との間の戦争なども、相手に対する悪意がまる出しという点で、単純で知恵のない者たちがする「いじめ」の一種とみることもできそうだ。

しかしこの辺で、「いじめ」問題は一つの壁につき当たる。「いじめ」とケンカ（戦争）を同じにとり扱っては、どうも焦点がボケてしまうようと思われるのだ。両者は似ているようで、どこかが大きく違うのではないか。とくにその行為の健康性の点で、これをはっきり区別してとり扱わなければ、きちんとした議論ができなくなる。とくに子どもの場合、その発達過程の中で、両者を区別してとり扱うことが大切だろう。

すなわち子どもの成長・発達の過程で、ケンカは大切な成長経験だが、「いじめ」は非健康的な行為であり、排除すべき行為として位置づける必要がありそうだ。

子どももいつかは成人して、大きな社会の構成員となる。しかし人間の作る社会の中には、常時大なり小なりの対立や競争がつきものだ。ときには相手に攻撃をしかけることだって必要かもしれない。もちろんしきりに攻撃から身をかわしたり、ときにはこれを受けて立つこともしなければならないだろう。しかしその際に大切なのは、破壊しつくしてしまうケンカではなく、建設的な結果をもたらすケンカをする必要性、つまりそのノウハウを身につけておくことである。相手を追いつめすぎると、窮鼠猫を噛む事態だって生まれてくる。戦い終わったときに、ある種の生産性を生みだすような事態収集を、はからなければならないだろう。ケンカもけっこうむずかしい社会的技術の一つという気がする。

そのノウハウを身につけておくには、子ども時代に、まだ十分社会的な庇護を与えられた環境下で、くり返しケンカ体験がつまれなければならないのである。男性がしばしば女性より社会化された行動様式を示すといわれる原因是、幼児期からの群れの中での経験、その中のケンカ体験のくり返しによって身につけられた社会的技術の結果かもしれない。こうした観点からすれば、最近の子どもたち

が、たいしたケンカも経験せずに成人してしまう傾向は、人格形成上大いに気になるところである。

しかし、「いじめ」はこれとはまったく違う性質の行為であろう。いじめられる側にもいじめる側にとどても、この行為は成長体験とは反対の極にある、非人間的な行為といわなければならぬ。

「いじめ」とケンカの区別

とすると、先に指摘したように、「いじめ」問題を掘り下げるためには、まず両者を見分けるために、いくつかの形態的な手がかりを吟味してみることから始めなければならない。実際に、筆者らが58年末に行った小学生対象の調査では、この点にいちばん苦心が払われたのである。子どもたちが、ケンカではなく、「いじめ」体験について答えてくれるよう、調査票の項目作りに配慮がなされた。それでも収集されたデータを見てみると、4年生では多少とも両者の間の混同があった気配で、5、6年とやや違った数字も見られたのである。

というわけで今回も、調査票の冒頭には(巻末に掲げたように)、『この調査は、最近大きな問題になっている「いじめ」について、中学生の皆さんのが考えや体験をうかがうためのものです。……なお、ここで「いじめ」というのは、ただのケンカや子どもっぽいイジワ

ルのようなものでなくて、1)やや長く続くいやがらせや暴力、2)やり方が残酷だったり、精神的苦痛をひき起こすようなものを指すことしたいと思います』と念入りなただし書きがつけられた。「いじめ」の嵐の中にいる中学生たちにとっては、この程度の説明ではほぼ十分だろうが、われわれおとなたちには、さらに念入りな定義と区別のための手がかりが必要だろう。事実行政が行った各種の「いじめ相談」を利用した母親たちのケースを見ていると、しばしばこの種の混同が見いだされ、単なるケンカやそれに近い行為で「敗者」となったのを、「いじめられた」とやや被害妄想的に訴える場合が、しばしば見いだされたのである。

「いじめ」とケンカを区別するいちばん大きな手がかりは、それがギリギリのところで「基本的人権」が守られる状況にあるかどうかではなかろうか。

たとえば昔の男の子たちには、ケンカをしかける際の約束事が共有されていたといわれる。「背後からしがけない」「武器を持たない(とくに相手が素手の場合には)」「1対多数でたたかわない」「女の子や年下の者を対象にしない」などである。これに万一違反すると、仲間から「卑怯な奴」とレッテルを貼られる。軍国主義下で、例の武士道精神の影響が子ども世界に及んでいたためだろうから、必

ずしも感心したことではないが、しかしとにかく男の子たちは卑怯と言われるのを恐れて、このルールを守っていた。

考えてみると、当時の子どもたちのこのようなケンカの約束事は、ケンカが「いじめ」的要素を帯びないよう、一つのガイドラインの役割を果たしていたことにもなる。しかし現代では「卑怯」は死語も同然だ。「いじめ」という人間として卑怯で許されない行為に、少なからぬ数の子どもたちが加わりながら、平然としていられるのは、戦争の終結と共にこの概念(卑怯)もわれわれの社会から失われてしまったことによるのではなかろうか。

さてここで、「いじめ」とケンカを見分けるための形態上の手がかりを考えてみることにしよう。

①相互の力のバランス

ケンカは原則として、力の対等な者どうしが行う。1対1、集団対集団、同性間、同年齢間、同じ地位の者どうしが原則だ。

しかし「いじめ」は、こうした力のバランスを大きく崩しているのが特徴だ。1対集団で行われるのが「いじめ」の典型であるし、またおとな社会にまで拡大して考えてみると、親の子に対する折檻、嫁と姑の確執、教師の生徒に対する体罰なども、多分に力のバランスを欠いた行為であろう。

②継続期間

ケンカは多くの場合、一時的に激しい力の

ぶつかり合いがあるが、短期間で終わることが多い。つまり激しいが故に、持続できない。これに対して「いじめ」は小学生のデータでも、半数以上が1学期以上継続している。

長期化するためには、それなりに攻撃方法も工夫される。「○○菌遊び」をはじめとして「いじめ」が陰湿だといわれるのは、この点から生まれる特徴であろう。

ではなぜ長期化するのか。たぶん「いじめ」はケンカに比べて、ゲーム的要素、楽しみの手段的要素があるため、「長い間楽しもう」というメカニズムが働くためと思われる。

③いじめられる側（しかけられる側）の過失の有無

ケンカはほとんどの場合、しかけられる側に何らかの過失（故意にせよ、そうでないにせよ、相手に危害や損失を与えたなどの）がある。隣りの子の牛乳瓶をひっくりかえしたら、うっかりしてであっても相手が怒るのはもっとだし、そのため2、3発なぐられたとしても、ある程度はしかたがないだろう。しかし「いじめ」にあう子たちには、その行動や性格上、何らかの弱点（小学生のデータによれば、不潔、のろま、臆病、いかにも弱そう、運動神経がにぶい、などが特徴であった）があるものの、それは単に個人の性格的特性にすぎず、とくに相手や集団に損失を与えていたわけではない。すなわち自分が相手に責任をとる必要がない状況のもとで、攻撃される

のが「いじめ」であり、多くは、「ある日突然、理由もなくいじめられるようになった」のである。

④ふつうの子の参加（いじめる側の特徴）

どこの社会でも、ケンカをしかけるのは一部の「悪い奴」であることが多い。たとえば暴力団や犯罪者（必ずしも全員ではないだろうが）がその例である。しかし「いじめ」に加わるのは、クラス内の悪い子というより、「ふつうの子」または「よい子」である場合が多い。とくに小学生の「いじめ」にはその特徴がある。

悪い奴からは、誰しも身を守ろうとし、その構えももてる。しかし「ふつうの子」「よい子」からの攻撃は予測しにくく、またその行為から受けるダメージも大きいと思われる。

以上4つの条件を考えてみたが、今日「いじめ」として扱われている行為の中には、4つの条件をどれも十分に満たしているような典型的な「いじめ」から、限りなくケンカに近い（どの条件も十分には満たしていない）「いじめ」、もしくはケンカそのものまで、その性格はいろいろではなかろうか。

健全育成の見なおしへ

子どもたちの間に成長のひずみが生じはじめている気配を、われわれはしばらく前から感じはじめていた。登校拒否にせよ、校内暴力や家庭内暴力にせよ、マスコミが子どもた

ちの間に起こっている今日的な問題をとり上げる度に、われわれはその思いを新たにしてきた。子どもたちの上に、何かが起りはじめている。非行や登校拒否を起こす子どもはごく一部の者たちかもしれないが、その周辺には、心身ともに半健康状態とでも名づけうるような、どこか何か、危険な部分をもつ子どもが、数多くいるのではなかろうかと、それが念頭を去らないままに日を数えてきた。

しかし数年前から関係者の間で憂慮されてきた子どもの世界における「いじめ」の流行は、それがごく「ふつうの子」、もしくは「いい子」による行為であるだけに、われわれをうろたえさせた。やっぱりそうだったのか、という思いがわれわれの間を駆けぬけた。われわれは、一口にいって子どもたちの健全育成に失敗したのである。

すべての子どもを心身ともにすこやかに育てよう。その願いはすべてのおとなたちの願いであるはずなのに、われわれの前には、弱い者いじめという、もっとも非人間的な行為に加わりながら、それを何とも思わないかのような子どもたちの姿がある。青少年の健全育成とは、これまで折ある度に使われてきたお役所用語だが、いささかマンネリで手あかのつきかけた感じがして、筆者はあまりこのコトバが好きではなかった。その理念には賛同できても、表現としてはもっと感性のあるコトバを使いたいという思いがあった。

しかし子どもを健全に育てるこのむずかしさは十分承知しているつもりでありながら、改めてそのむずかしさを思い知らされたのが、最近の「いじめ」問題ではなかったか。それを思い知ると同時に筆者の中には、健全育成というコトバが、今までと違ったひびきをもって再生されるのを感じたのである。青少年の健全育成。すべての子どもや若者たちを、とびぬけて上等に、または賢く育てようとする前に、まず心身ともにすこやかに育てるここと。これがこのコトバのもつ意味ではなかったか。いじめ問題はある意味では、子どもたちの健全育成の大切さを改めてわれわれに教えてくれたように思う。

「いじめ」と題された今回のレポートは、そうした数々の思いと願いをこめて作成された。「いじめ」という悲しむべき行為を子どもの世界から追放するために、われわれは今何をなすべきか。言い換えれば、子どもの健全育成を再構築する手がかりを求めて、われわれは「いじめ」の実態に、できるだけ正確に接近し、その背景の分析をすすめたい。幸いなことに、58年末に行われた小学生対象の調査結果（福武書店刊『モノグラフ・小学生ナウ』vol. 4-2）があるので、そのデータを用いながら、今日の「いじめ」問題について、一応のまとまった結論をも得ることができればと考える。



調査レポート いじめ

東京学芸大学助教授

深谷和子

調査を実施して

このレポート「いじめ」は、小学生を対象に行われた「いじめ」調査のレポート（深谷、中原『モノグラフ・小学生ナウvol. 4-2』昭和59年5月刊行）の延長線上に位置するものである。

昭和58年初秋にわれわれが、小学生を対象に「いじめ」の量的把握を企図したとき、いじめは今日のような社会問題とはなっていなかった。ただ一部の教育現場の人たちや、子どもの問題行動を扱う臨床家の知るところであり、それに一部マスコミがぱつぱつ反応を示していたにすぎない。筆者と中原が当時「いじめ」調査を企図したときも、実施段階で多くの学校の調査拒否に遭遇した記憶がある。すなわち「うちの学校に限っていじめなどが生じているはずがないので、調査しても無意味でしょう」「寝た子を起こすようなものだから」が、その理由のほとんどであった。

しかし「いじめ」は、たぶんその量的拡大に伴って、一部マスコミの関心をよび起こす

こととなり、ごく一部のケースをめぐって、かなりセンセーショナルな報道が行われる場合も多くなった。「いじめ」は子どもの世界に潜行する行為なので、おとなたちには把握しにくく、どう報道されても、それに反論する材料がないために、マスコミに先導されるままになる危険性もでてきた。そこで筆者らは、子どもの側からの地道なデータ収集が必要と考えて、58年末に小学生対象の調査の実施にふみきったのである。

このレポートは、当初あまり話題をよばなかった。しかし59年から60年にわたって、文部省、法務省、警察庁などがそれぞれ実態調査やいじめをなくすための啓発活動に乗りだしたこともあって、この問題は一挙に社会問題化し、それと共に、筆者らの資料も、数少ない子どもサイドからの資料として、活用されるようになった。

多方面からのデータの要請に答える中で、やはり中学生対象の調査データの必要に迫ら

れることになった。そのために、継続的にデータを収集する意図で、60年2月から準備にとりかかり、5月から6月にかけて調査が実施された。

アウトプットされたデータは、小学生の「いじめ」と中学生の「いじめ」が、多くの点で共通点をもちながらも、またかなりの部分で発達段階にそった変化を示していることを浮かび上がらせている。

このレポートの末尾にも指摘したように、今日子どもの世界で非人間的な「いじめ」が拡がっているのは、われわれおとなたちが、これまで子どもたちの教育に大きな見落としをしてきたことを示唆するもののようにも思

われる。

われわれは子どもたちに、世の中で、強くて秀れたものや自分の好きなものだけを「価値あるもの」として大切にするよう教えてきたのではなかろうか。弱くてダメで自分の気に入らないものこそを、より十分理解し大切にしていこうとする態度、すなわち子どもの世界に「福祉」の精神を育てる教育、それこそが今後課題とされなければならないのではないかろうか。

末尾ながら、調査にご協力いただいた学校とたくさんの生徒さんたちに、厚くお礼を申し上げたい。

昭和60年8月

本報告書の要約

① 調査テーマ

小学生対象に行われた「いじめ」調査に引きつづき、中学生の世界における「いじめ」の実態に接近し、それへの有効な対応策を見いたそうとした。

② 調査対象と期間

北海道から九州までの8つの公立中学校の生徒1,717名（収集された調査票より無作為に80%を抽出）。調査実施時期は昭和60年5月～6月。

③ 「いじめ」とケンカの区別を

「いじめ」の問題に対応しようとするときにまず必要なのは、「いじめ」とケンカを区別することであろう。前者は子どもの世界にあってはならぬこと、後者は子どもの社会化過程において、成長体験として数多く経験する必要がある行為と考えられる。

なおその区別は、①相互の力のバランス、

②継続期間、③しかけられる側の過失の有無、
④ふつうの子の参加の有無などの手がかりに
よるべきであろう（P 4～P 6）。

④ いじめの出現率は約3割

今現在いじめられている生徒がクラスにいる割合は、男女それぞれ3割にのぼる(P. 13図1)。地域差も多少あって、男子で約2~4割、女子では1~5割の開きがある。いじめを生む風土や社会的流行の差もあるかもしれない(P. 14表2)。

⑤ 「いじめ」は一部のグループで

多くのクラスで、いじめの被害にあっている者は「1人」が約6割で、圧倒的である。またいじめる側の人数は、クラス全体（または男子全部、女子全部）というよりも、「一部のグループ」または「1人」が多く、合わせて男子で7割、女子でも5割近くに達する。この点は、「クラス全体」でいじめるのが典

型的な小学生の場合と大きく異なる(P. 16図4)。

⑥ 非行的要素が増加する

「いじめ」の手口は、「悪口やからかい」が8割と圧倒的であり、たいていのケースに伴われる。「金品の奪取」は1割前後と少數例だが、とくに3年生から増加の気配を見せる。小学生の「いじめ」が集団でのおもしろゲーム的要素をもつてのに対し、中学生では、ときによっては犯罪や非行へ発展する可能性を含むものようである(P. 16図5、P. 21図6、P. 34図17)。

⑦ 1学期以上続くケースが5割

1学期以上継続している「いじめ」は、全体の5割にも達し、学年を追ってその割合が増加する(P. 22図7、P. 23図8)。

⑧ 担任は5割しかキャッチできない

担任が、現在クラス内で起こっている「いじめ」を「ぜったい・たぶん知っている」と答えた生徒は5割にすぎず、小学生調査の75%（6年生）を大きく下回る。いじめに加わる者の人数が減り、またその手口も巧妙になることによるのであろう(P. 23図9)。

⑨ 冷たい心

「いじめ」についての自由記述の中からは、いじめられている者に対して、多分に冷たく凍りついたまなざしを投げている様子が感じとれる。いじめられる側が（いじめても反抗ができない）弱者だからおもしろ半分に、というメカニズムと、自分が気に入らない対象なのでそれを排除するために、とのメカニズムの両面から、いじめが行われていると推測される(P. 17～P. 19、表3、表4)。

⑩ 小学生時代にいじめられた者

小学生時代におけるいじめられ体験の所有者は、女子で35%、男子で29%となっている(P. 26図10)。また5%近くの者たちは、一時的な「いじめ」ではなく、長期間にわたり「いじめ」の被害にあっている。

⑪ 中学生になってからいじめられた者

中学生になって「いじめ」の被害にあった者は、ほぼ2割に達する(P. 27図11)。また学校による差は1割強から3割弱まで、多少開きがある(P. 27表5)。

⑫ いじめの季節

小学生の「いじめ」は5割が2学期に起こっているが、中学生の「いじめ」は7割近くが4月から7月に開始されている(P. 28表7)。

⑬ クラスを越えて

「いじめ」が起こっている場所は、クラス内が全体の3分の2、クラス外が3分の1を占めている(P. 29図13)。

⑭ 理由もなくいじめられる

「いじめ」の特徴は、いじめられる原因が、本人につかみにくい点にある。全体の6～7割の生徒は、これといって理由がないのに、突然いじめられるようになったと答えている(P. 32図16)。

⑮ いじめの手口

女子の「いじめ」は「無視・仲間はずれ」が多く、男子は女子より「暴力がらみ」や「金品の要求」「イジワル・イタズラ」が多い傾向が見られる(P. 34図17)。

⑯ 物言わぬ生徒たち

「いじめ」にあった生徒のうち、男子の47

%、女子の24%は、そのことを誰にも話していない(P.35図18)。また周囲の者も、それを他人にもらすことを「チクる」と称して、回避しようとする。「いじめ」を打ち明ける場合、その相手は圧倒的に「親しい友人」である(P. 35図19)。

⑯ 先生は何もしてくれなかった

勇気を出して「いじめ」を打ち明けても、先生は話を聞いてくれただけで、何ももしてくれなかったとする者は、44%にものぼる(P. 37図20)。

⑰ 担任に相談にいかなくなる親たち

わが子が「いじめ」にあっていることを知ったとき、担任に相談にいった母親は、男子の親で17%、女子の親で26%と意外に低い割合である(P.38図22)。

⑱ 仲間のためにたたかった生徒は9%

友人が「いじめ」にあってているときに、いじめている子に注意したり、ケンカしたりしてくれた子は男子で11%、女子で6%。またケンカをしないまでも、友人が「自分を守ってくれた」と答えた生徒は、男子の21%、女子の35%にすぎない(P. 39図23)。

⑲ なすすべもなく時は流れ

「いじめ」が解消した一番の理由は、「自分ががまんしたので」「クラスや学校が変わったので」で、合わせて5割前後にも達する。また「自分が勇気を出してたたかったので」は、男子で12%、女子で21%でしかない(P. 40図24)。

⑳ 後に残ったものは心のキズ

「いじめ」をよい体験だった、それによって成長したと答えた者よりも、「心の中にキ

ズが残った」「友人不信におち入った（こわくなつた）」とする者のはうが、はるかに多い(P. 41表13)。

㉑ いじめられやすい子のタイプ

いじめられやすい子のタイプとして生徒たちがあげた項目には「わがまま、生意気」と、「不潔、臆病、孤立、いかにも弱そう」の2つの側面があり、小学生と多少傾向が変わってきている(P. 44表15)。

㉒ いじめられやすさと性差

女子は男子より、「まじめで成績がよい」点が対象にされやすく、男子は「弱さ、運動神経のなさ」が、対象にされやすい(P.46表17)

㉓ いじめの拡がる土壤

いじめは、クラスがうまくいっていれば、比較的起こりにくい(P.47図25)が、子どもの年齢が高くなるほど担任につかみにくくなる(P.48図26)。しかし「いじめ」は、いじめられる側にも多少の原因、悪い点があるからだとも多くの生徒は考えており、それが「いじめ」に対して多くの生徒を傍観させたり、ときに参加させたりする土壤となっているのであろう(P. 49図27)。

㉔ 名案が浮かばない

「いじめ」は放置すれば一層拡がるだろうが(P. 52図31)、といって教師や親の力もたいしてその解消に役立たない(P. 50図28、P. 51図29)と考えている生徒が多い。

㉕ 「いじめ」解消のために

「いじめ」解消のためにわれわれは何をすべきかについて、基本的視点からノウハウまでを、P. 53から P. 55までに論じた。

第Ⅰ章 クラスの中の「いじめ」



1. いじめの出現率

今回の中学生対象の「いじめ」調査は、東京、釧路、旭川、札幌、仙台、千葉、福岡にある 8 つの公立中学校の 1 年生から 3 年生計

1,717名を対象に、昭和60年 5 月から 6 月にかけて行われた(表 1)。

(表 1) サンプル数

性別 \ 学年	1 年	2 年	3 年	計
男子	178	344	367	889
女子	174	309	345	828
計	352	653	712	1,717

〔調査概要〕

- 対象 ● 東京、釧路、旭川、札幌、仙台、千葉、福岡の 8 つの公立中学校の 1、2、3 年生
- 期間 ● 昭和60年 5 月～6 月
- 方法 ● 学校通しによる質問紙調査

まず「いじめ」の出現率から見てゆこう。図1によれば、今、いじめられている子がいるクラスは男女それぞれほぼ3割にのぼっている。（男子の「いじめ」は男子の回答の数字を、女子の「いじめ」は女子の回答の数字を用いた。これは同性のほうが多いじめの把握がより適確に行われていると考えたためである。事実卷末の集計表に掲げたように、「いじめがある」とする者の割合は、異性の場合にやや低くなっている、情報が一部入ってきていなっていることが示されている。）

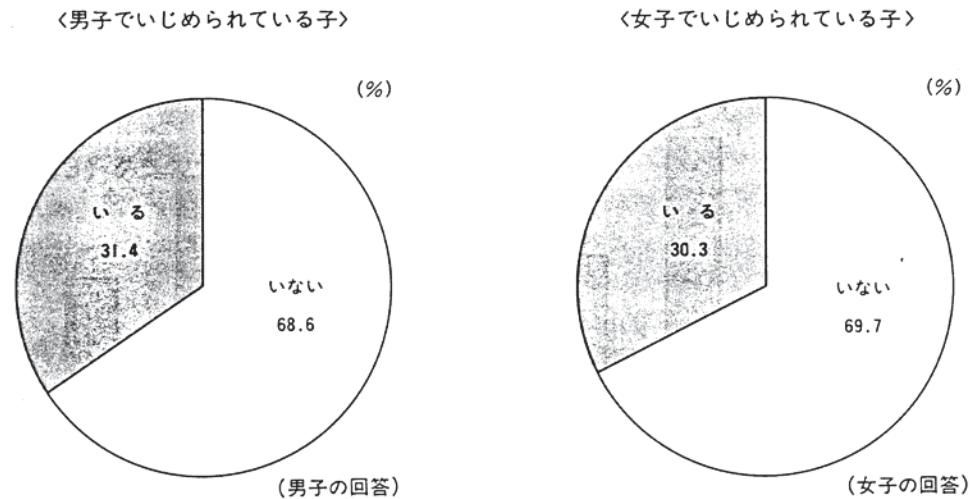
なお昭和58年末に行われた小学生調査では、5年生6年生とも、ほぼ5割の出現率を見ている。後述するように、小学生の「いじめ」は、中学生の場合よりかなりゲーム的要素を含むので、出現率も高いのであろう。むしろ、知恵もからだも発達した中学生たちの「いじめ」が男女それぞれ3割ものクラスに起こっていることのほうが、小学生の場合より数字

は少なくとも、重大な意味をもつものとして受けとめなければならないだろう。

また学校別のデータを見てみると、表2が示すように（サンプルの学年が学校によって多少バラツキがあるので、その分を多少考慮に入れなければならないが）、学校によってかなりの差が見いだされる。男子では2割弱から4割弱まで、女子では1割弱から5割弱までの開きがある。なぜこうした差があるのか。いじめを生みやすい風土や一種の流行のようなものもあるかもしれない。

次にクラスの中の「いじめ」の有無を学年別に見てみると、図2のようになる。わずかだが1年生より2年生が多く、3年生になると減っている。進学をひかえた学年では、忙しくて「いじめ」の余地もなくなるのか、それとも生徒たちが健康性を増していくのか。この点は、高校生にまたがるデータ収集が必要だろう。

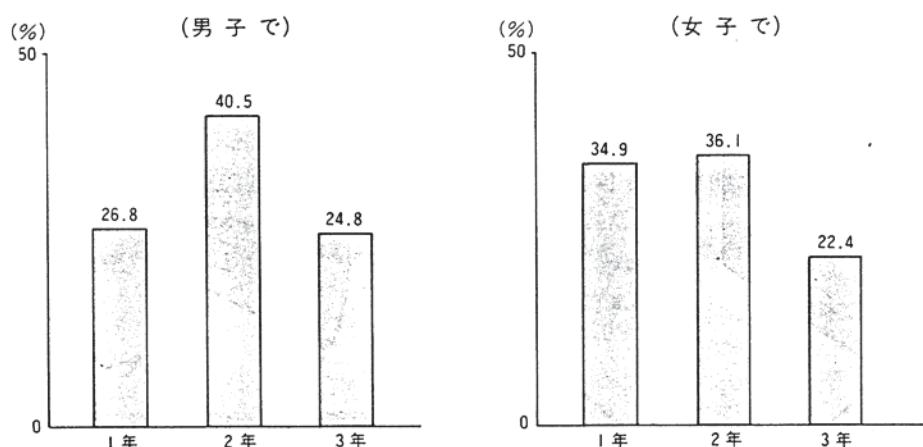
（図1）クラスで今、いじめられている子



(表2) クラスでのいじめ発生率 (学校別)

学 校	男 子	女 子	(%)	学 年
釧 路	33.3	37.8		1 2 3
旭 川	24.4	34.1		1 - -
札 幌	18.8	24.6		- 2 3
仙 台(A)	38.8	41.9		- 2 -
仙 台(B)	17.3	25.2		- - 3
東 京	37.8	8.8		1 2 3
千 葉	27.9	47.5		- 2 -
福 岡	17.3	25.2		- - 3

(図2) 今、いじめられている子のいるクラス



2. いじめのかたち

「いじめ」の出現率を概観したところで、次はこれらの「いじめ」が、どんなパターンで行われているかを、追ってみることにしよう。

まずクラスの中で「いじめ」の被害にあっている者たちの数だが、図3が示すように圧倒的に多いのは「1人」である。いじめはケンカと比べると、多少ともゲーム的要素を含む行為なので、多くの場合、対象としてクラスに1人いればいいともいえるのかもしれない。男子、女子のいずれの場合も、クラス内で「1人」が対象とされているケースが6割に達している。

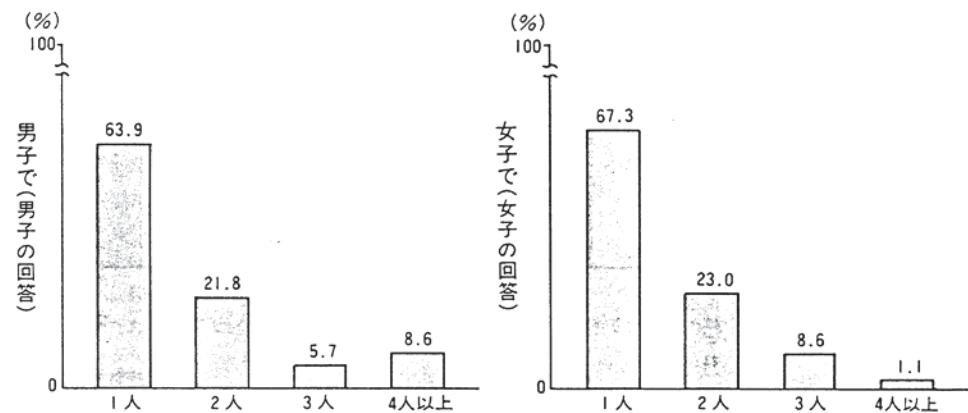
次に図4は、いじめる側の人数だ。小学生の場合66%が全体もしくはそれに近く（男子全部、女子全部など）からいじめられていたが、中学生になるとかなり様子が変わってくることがわかる。男子の場合、全体もしくはそれに近くからは、28%にすぎず、「ある一部のグループから」が57%、女子はそれでも全体からが53%を占めるが、「一部のグルー

プから」も42%と多い。すなわち「ある一部のグループから」「ある1人から」を合わせると、男子で73%、女子でも47%に達するのである。

すなわち、小学生の場合は、ごくふつうの子どもが全員（クラス全体もしくは男子全部女子全部に近い形で）参加して、半ばゲーム的に「いじめ」を楽しむのに対して、中学生の「いじめ」は、一部のグループ（非行グループやそれに近接するグループも含めて）が個人を対象に行う、といった違いがありそうだ。とくに男子のいじめにその傾向が顕著である。しかしこの点については、さらに後のデータでも確認していくことにしよう。

さて次は、いじめられ方についてである。新聞などに事件としてとりあげられたケースの中には、かなり残酷ないじめの手口もあるようだが、ここでは後に自由記述の中にその具体例を見ることにして、図5でとりあえず量的な把握をしてみよう。図のカッコ内は58年末に行われた小学生調査の数値である。図

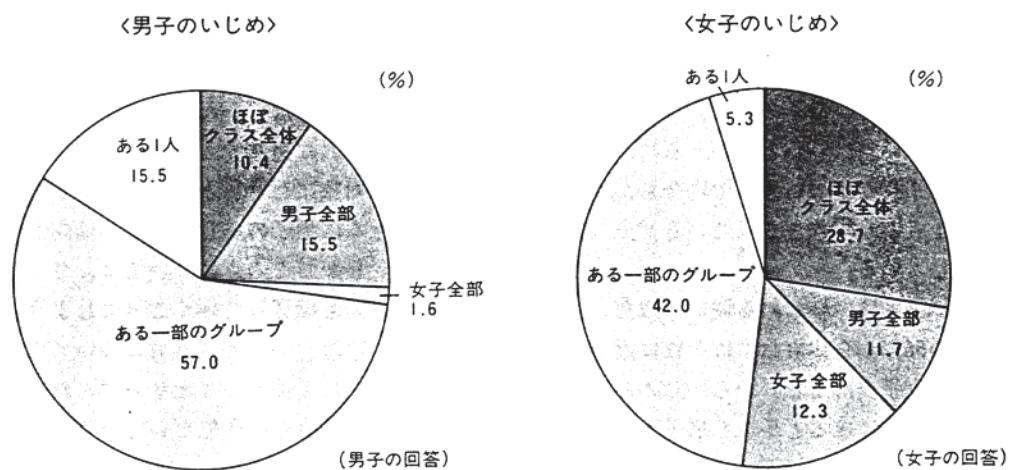
(図3) クラスでいじめられている子の数



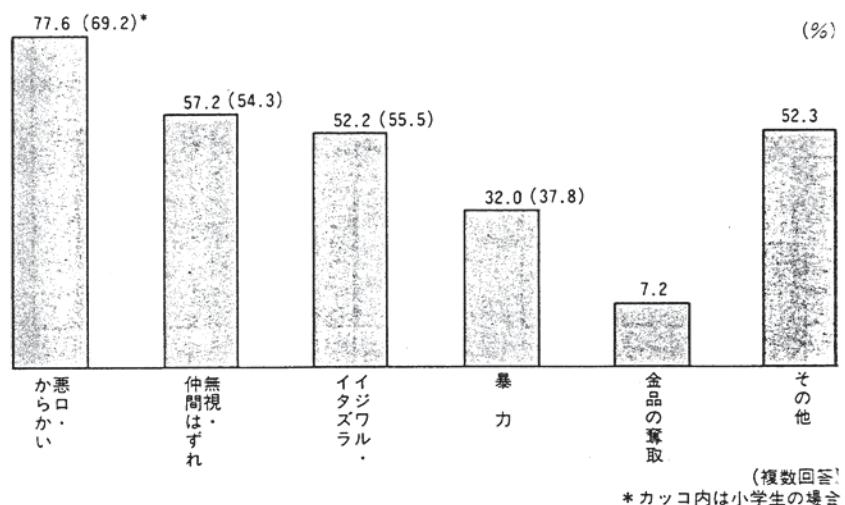
が示すように、両者の数字はほとんど変わらない。「悪口やからかい」が、量的には8割のケースに及んでいる。どんな「いじめ」にも、多少このパターンが伴われるのだろう。また非行や犯罪的因素を含んだ「金品の奪取」は、ケースとしてはしばしば聞かれるが、出現率

の上では、1割に満たない少数例であるようだ。注目すべきは「その他」の頻度の多さであろう。いじめの手口も中学生になると、知恵の発達と共に多様化するのだろう。なお表3、表4には、調査票に書き込まれた「いじめ」の具体例を掲げておいた。

(図4) 誰からいじめられているか



(図5) いじめられ方



(表3) いじめられ方〈男子〉

〈1年生〉

- バカにし、からかわれている（クラス全体から。頭が悪いのに出しゃばり、ウソをつくから）
- 〇〇菌遊び（男子全部から。小学生時代変わった色の服を何週間も着ていたとか）
- 悪口を言われたり、けられたり（クラス全体から。頭が悪いから、少し暴力をふるうから、動物に似ているから）
- 悪口を言われ、からかわれ、たたかれている（一部のグループから。何も言わないし、おとなしいから）
- 無視され、黒板に悪口を書かれている（男子全部から。先生の前だと調子にのるし、しらじらしくウソを言うし）
- 悪口を言われ、ボール遊びのとき、集中してあてられる（一部のグループから。弱い人に手を出したり、すぐ怒るから）
- 授業中、少しまちがった答えをするとそこを徹底的にバカにされる（男子全部から。小学校4年生までいばっていたから、クラスで人気のある人を泣かしたから、バカだから）

〈2年生〉

- 荷物を持たせる、用事を無理にさせる（一部のグループから。気が弱いから）
- 悪口、椅子にガビュウを置いて座らせる（一部のグループから。ものすごく短気で、怒りやすく、すぐ暴力をふるうから）
- 男子からはいやな仕事をさせられ、女子からはバイ菌扱い（クラス全体から。小学校から続いている）
- その子の欠点や不得意な教科のことをいう（クラス全体から。授業中、前に物を投げて先生に見つかった。それをおもしろがって見ていたため）
- 売れないローカルタレントの名をつけて、バカにする（クラス全体から。不潔だから）
- からかったり、バカにしたり（一部のグループから。もと養護学級にいたから）
- なぐられる、けられる、物をとられる。ただし後で返すが。（男子全部から。ケンカが弱い。たぶん小学生時代からずっと続いている）
- 「汚い」「よけろ」「お前のメガネでにらまると目がくさる」などいろいろの悪口（男子全部から。小学生時代からで、よくわからない）
- からかわれている（一部のグループから。忘れ物が激しいので）
- 仲間はずれ（一部のグループから。しゃべりすぎで出しゃばりだから）

〈3年生〉

- あらゆるいじめ、とくに呼び出されて、なぐるけるの乱暴（一部のグループから。何か弱味をにぎられている感じ）
- 休み時間にからかたり、けとばしたり（一部のグループから。いちいち人の言うことに文句をつけたりして、口うるさいから）
- 金をとられたり、野沢をさせられたり（ある1人の子から。小学生時代その子にケンカで負けたから）
- いろいろな物を買わされている（男子全部から。？）
- パンツを下げられる（クラス全体から。いつもすけめ話をし、エロ本を見て、女子にすぐぶつかっていって、顔も頭も悪いから）
- ピンタやたたかれている（男子全部から。頭が悪くて少しほけているような気がするから）

()内は加害者の人数、いじめられる理由

(表4) いじめられ方 <女子>

<1年生>

- 仲間からはずす、しゃべらない、その人が近づいたら逃げる（一部のグループから。でしゃばりで自分勝手だから）
- 陰口と、直接に文句を言う（一部のグループから。まじめで冗談が通じないので）
- お弁当もいっしょに食べず、何を聞かれても「さあ、知らない」、遊ぶときも仲間に入れない（女子全部から。なれなれしくて、おせっかいだから）
- その人に聞こえるように「キライ」と言ったり、近づくと逃げたり（クラス全体から。副委員をやっているのにドジで、クラスに恥をかかせるから）
- 仲間はずれ（クラス全体から。自分のじまんばかりするし、一人ごとを言うから）
- 無視し、仲間はずれにしたり、わざとぶつかったりする（一部のグループから。その人が同じグループの人ではなく、他のグループの人といたから）
- 無視し、わざと聞こえるように悪口を言う（一部のグループから。他の組の人と仲よくしているから）
- 相手にしない、近よって来たら逃げる（クラス全体から。うそをつく、授業をサボる、責任感がない、悪口を言うから）
- 仲間はずれ（一部のグループから。小学生時代、いじめのリーダーだったのに、今はおとなしくて、いい子にしているから、ぶりっ子だから）
- 悪口を言う（クラス全体から。何も言わないでのこのこついて来たり、まじめぶったり、いっしょに帰っているのに違う人と帰ったりするから）
- 無視する（女子全部から。自分のじまんばかりするし、他人の陰口を言うから）
- 無視や仲間はずれ、悪口（クラス全体から。皆にとけ込めず、いい子ぶっているから）
- 口をきいてもらえない、その人の机や椅子、物にさわらない（女子全部から。行動がのろいし、不潔だから）

<2年生>

- そばに近づくとくさるとか、さわったら変になるとか言われる（男子全部から。しゃべりすぎで嫌われる）
- 悪口やイタズラ（男子全部から。前のクラスから続いている。前のクラスの人は顔が変だ、気持ちが悪いと言っている、他の人は同調しているだけかもしれない）
- からかわれている（男子全部から。友だちもいなくて、皆から好かれないタイプだから）
- きたながられて近よらない（男子全部から。顔と性格、身だしなみが悪いから）
- あらゆるいじめ方で（クラス全体から。くさいし不潔、生意気だから）
- 近よらない、さわらない、話をしない（男子全部から。嫌いだから）
- 「お前なんか、どっかに行け」などと言われる（クラス全体から。あまりにも静かすぎて気持ちが悪い）
- いんけんにしつこく、わざと聞こえるように悪口を言う。その子が行動するたびに笑う（一部のグループから。のろのろしていて、ダサイから）
- バカにしている、おもしろ半分で。無視している（クラス全体から。授業中にねむりしたり、少しボケているので）

- その子が話すと耳をふさぐ（男子全部から。外見が悪いし、先生につげ口するから）
- 仲間はずれ（クラス全体から。人に対する印象が悪いから）
- 話に入れない（クラス全体から。ウソつきで、生意気で、暴力をふるうから）
- いいようにからかわれたり、無視されたり（クラス全体から。いやな性格をしているから）
- 班がえのときに入れない、ねくら、バカなどと言われて（クラス全体から。おとなしすぎるから）
- ふつうの人のすることでも、その子がすると文句を言う、机をたおされる、靴をかくす、変形させる（クラス全体から。じまんしたがる、悪い点を注意すると反発するから）
- からかう（クラス全体から。泣き虫でウジウジしているから）

〈3年生〉

- ひたすら無視（女子全部から。登校拒否がある、何かあったら誰でもいい感じでついてくるから）
- 子分にして何でもやらせる、やらないと暴力をふるう（一部のグループから。いじめている側の頭がおかしい）
- 仲間はずれ（女子全部から。ずうずうしい、人の後ばかりついてくる、しゃべらない、助けてあげても、ありがとうとすら言わないから）
- 無視する（一部のグループから。部活動の部長になり、自信過剰になって、いい気になったから）
- しつこく悪口を言う（一部のグループから。からかいやすい人だから）
- 欠点を見つけて笑いものにする（女子全部から。気持ちの悪い変な人だから）
- 無視されている（女子全部から。おとなしい、何でも正しくするから）
- 無視する（クラス全体から。性格が皆と合わない、暗いし、まじめすぎる、話していておもしろくない）
- あいさつだけで、話さない（一部のグループから。勉強のこととかじまんばかりして、話が合わない、性格の不一致）
- そうじなど、いやなことをおしつける（一部のグループから。おとなしくて、あまりしゃべらないから）
- たたかれる（一部のグループから。しゃべらないから）
- バイ菌扱い（一部のグループから。暗いし学級になじめないから）
- バイ菌扱いし、差別し、机を離す（クラス全体から。人をバカにしたり、けったり、なぐったりするから）
- 本人のいやがるあだ名をつける（男子全部から。髪が乱れているので全体にだらしなく見えるから）
- いろいろの悪口（男子全部から。顔が悪いから）

()内は加害者の人数、いじめられる理由

ではこうしたいじめの手口は、学年と共にどう変わっていくのだろう。

小学生の場合のいじめの手口を以下に引用したが、「イジワル・イタズラ」「暴力」な

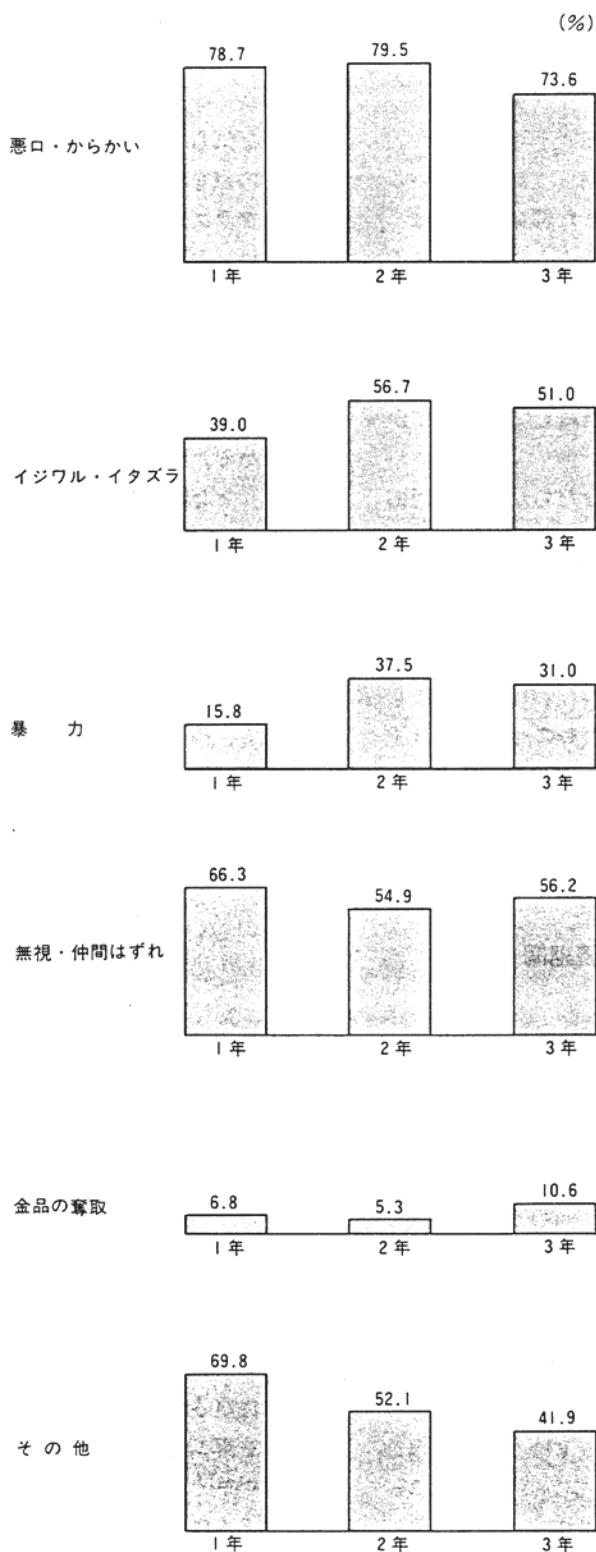
項目	学年	小学校 4 年		
		5 年	6 年	
悪口・からかい		83.7(%)	85.1(%)	< 88.6(%)
イジワル・イタズラ	64.0	>	56.7	58.3
暴力	47.3	>	42.7	40.2
無視・仲間はずれ	64.8		64.6	< 68.1

どが 4 年から 5 年にかけてやや減り、変わって「悪口やからかい」「無視・仲間はずれ」が多少増加するという、発達段階にそってやや社会化されたパターンへの移行の傾向が見いだされるものの、小学生の場合全体として大きな変化は見られない。

しかし図 6 に掲げたように、中学生の場合、「イジワル・イタズラ」「暴力」などが逆に 1 年から 2 年にかけて急激に増加し、「無視・仲間はずれ」が減っている。また「金品

の奪取」は、全体の中で占める割合は低いものの、3 年生で急激にふえているのが注目される。つまり小学生の「いじめ」は、先にもふれたように、多分にゲーム的要素を含んだ行為とみなされるのに対して、中学生の場合は、マスゲームというより比較的一部の者たちによる、多分に非行的要素を含んだ行為ともみなすことができそうだ。とくに男子の場合にこの傾向が顕著に見いだされる。

(図6) いじめられ方×学年



3. いじめは深く静かに

次に「いじめ」の継続期間を見てみよう。図7が示すように、1学期以上継続しているケースが5割を上回る。また図8によれば、1学期以上継続する「いじめ」は、学年を追うにつれて増加している。（ただしこの場合、1年生の数字は、入学後まだ3か月前後なので、直接の比較には用いられないだろう。あっても、小学校時代から継続しているわずかのケースと思われる。）

さて「いじめ」におとなたちがうまく対応できない最大の理由は、その状況を把握しにくい点にあるといわれる。つまり本人からも周囲の友人からも、直接担任に訴えられないばかりか、おとなたちにできるだけ知らせない努力がされる。しかしあれわれ部外者にしてみれば、担任にせよ親たちにせよ、毎日子どもと接触している者たちに、どうしてこうした重大な問題が把握できないのだろうと不

思議な気もする。

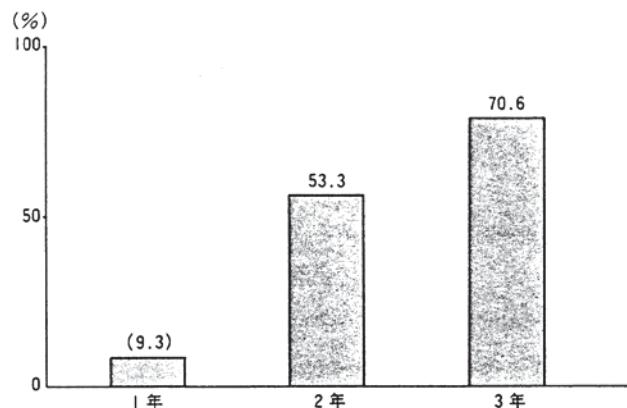
この点を図9によって見てみよう。担任が、現在クラス内で起こっている「いじめ」を「ぜったい・たぶん知っている」と答えた者は、5割にすぎない。それどころか、「担任はぜったい知らない」と断言している者すら1割にものぼる。これは参考のため図の下部に掲げた6年生の場合と、大きく違っていることがわかる。「ぜったい・たぶん担任は知っている」とした者は、6年生の場合75%にも達している。

先にふれたように中学生段階では、「いじめ」に加わる者の数が一部のグループに限られるようになり、また「いじめ」の手口も、巧妙になり非行への傾斜が見られるようになるので、担任には一層把握がむずかしくなるのであろう。

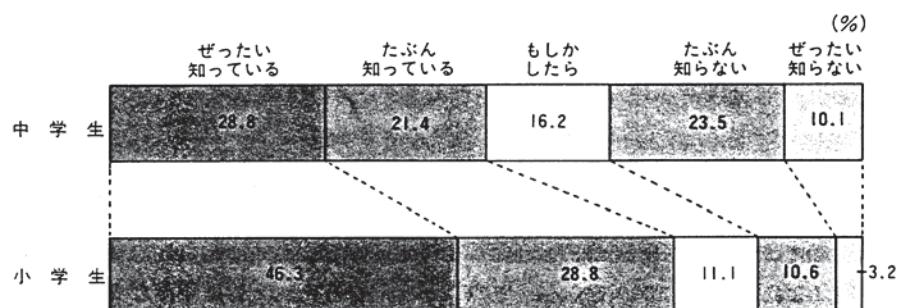
(図7) いじめの継続期間

全　　体	1週間 くらい	2週間 くらい	1ヶ月 くらい	1学期 くらい	1学期以上	(%)
	14.0	7.8	18.6	8.6	51.0	

(図8) 1学期以上のいじめ



(図9) 担任は知っているか



4. ケースを追つて

数値の上から「いじめ」の輪郭をなぞってきたところで、次に自由記述の中で「いじめ」の正体を追ってみよう。

調査票の中には、いじめに関する自由記述の欄が2か所ある。一つはクラスに現在起こっている「いじめ」について、もう一つは自分の体験した「いじめ」についてである。筆者はこのうち、自分の体験した「いじめ」のほ

うに、やり場のない憤まんとうらみをこめてのずっと詳細で鮮明な記述があると予想していた。しかし結果は逆だった。他人事のほうが、淡淡と書けるのだろうか。クラスの「いじめ」のほうがずっと記入量が多く詳細であった。

その記入された内容のうち、多少とも毛色の変わったものだけを、できるだけ原文に忠

実にまとめたのが、前に掲げた表3、表4である。はじめに「いじめ」の方法を、カッコ内には加害者の人数といじめられる理由とを記してある。

数値の上からも見てきたように、「いじめ」の手口では、女子より男子に非行スレスレの悪質な「いじめ」や暴力を伴うケースが多い。「けられる、たたかれる」などの他「用事を無理にさせる、金品を要求する、パンツを下げる」などの残酷な行為も目だつ。

しかしそうした「いじめ」の手口もさることながら、筆者を驚かせたのは、その理由の多彩さと語り口の冷やかさであった。

- ①頭が悪い、顔が悪い、不潔、無口、暗い、
おとなしい
- ②弱いものいじめをする、乱暴、短気
- ③出しゃばり、口うるさい、おしゃべり、
自分勝手、成績がいいのを自慢する、自
信過剰
- ④まじめすぎる、ぶりっ子
- ⑤先生にチクったから
- ⑥すぐ怒る、すぐ泣く
- ⑦小学校時代から続いている
- ⑧その他（なれなれしくついてくる、他の
グループとつきあっていいる、など）

これらの理由を大別すると、Ⓐ集団の基準からはずれていて、しかも攻撃しても仕返しもできそうもない「弱者」だから「おもしろ半分に」（おとなしいから、のろいから、バカだから、ドジだから、暗いから、すぐ怒る（泣く）から、不潔だから）、Ⓑ自分が気に入らない奴だから「排除」するために（出しゃばりだから、生意気だから、自信過剰だから、自慢したがるから、まじめすぎるから、ぶりっ子だから、先生にチクったから）に分けられるように思われる。

Ⓐのタイプの「いじめ」の理由は、小学生の「いじめ」の中核にあるもので、いわば健

康な遊びの場をもたない、退屈した現代っ子たちが考えだした、「おもしろゲーム」なのではなかろうか。この場合は相手が、どんなにいじめても無抵抗だという見極めが必要だ。そしてⒷのタイプは、成長と共に加わった中学生的な特色だとともいえそうだ。自分にとつて目ざわりな対象を、正々堂々と正面から攻撃するかわりに、「赤信号そろって渡れば」の論理で、匿名性の下に斜めから攻撃する形をとろうとしているともいえそうだ。

しかも筆者が心外だったのは、生徒たちが現在クラスに起こっている「いじめ」の理由について語るとき、それがまったく心の痛みを感じさせない口調で、それどころか冷たく切り捨てるような、ときには憎悪すら感じられるトーンで語られていることだった。「バカだから、動物に似ているから、しらじらしくウソを言うから、いちいち人の言うことに文句をつけたりして口うるさいから、顔も頭も悪いから、嫌いだから、気持ちの悪い変な人だから、なれなれしくついてくるから」などの表現は、われわれの心を凍りつかせるのに十分な冷たさをもっているのではなかろうか。

むろん、「皆は不潔だと言ふけれど私には理由がわからない」「いじめている人たちの頭がおかしいのです」「1人が不潔と言いだしたら、それがうけてしまって」などの記述もあったが、しかし極めて少数だった。

「いじめ」という非人間的な行為をくり返していくながら、自分たちの側に3分の理、すなわちある種の正当性があるかのような言い方をしてはばかりない生徒たち。その姿を見ていると、オーバーかもしれないが、筆者は日本の将来に絶望感すら抱いてしまう。こうした凍った心の持ち主が、人生における勝者となって世を支配するとしたら、明日の社会はどんな姿をもつようになるのだろうか。

第II章 いじめられ体験を追って



現在、クラス内で起こっている「いじめ」の状況を見てきたところで、次は生徒たち自

身のこれまでの「いじめられ体験」の有無を追ってみることにしよう。

1. いじめられ体験の有無

まず図10は、生徒たちの小学校時代のいじめられ体験である。

図が示すように、男子、女子ともいじめられた体験をまったくもたないものは約7割。3割は、大なり小なり小学生時代に「いじめ」の被害を受けている。この数字は、58年12月の小学生調査の結果ともほぼ一致する。(いじめられ体験の所有者は、6年生の12月時点で約3割。ただし小学生の場合は性差があり、男子で18%、女子で41%となっている。)また小学生調査のデータと同じく、男子より女子

に被害者が多く35%で、男子は29%となっている。なかでも注目されるのは、「長い間いじめにあっていた」とする男子5%、女子4%の者たちの存在であろう。「いじめ」が一時的なものならまだしも、20人から25人に1人は、小学生時代長期的にいじめの被害を受けていたとは、人権侵害以外の何ものでもないと思われる。この子どもたちの周囲のおとなは一体何をしていたのだろう。

さて図11は、生徒たちが「中学に入つてから」経験した「いじめ」である。図が示すよ

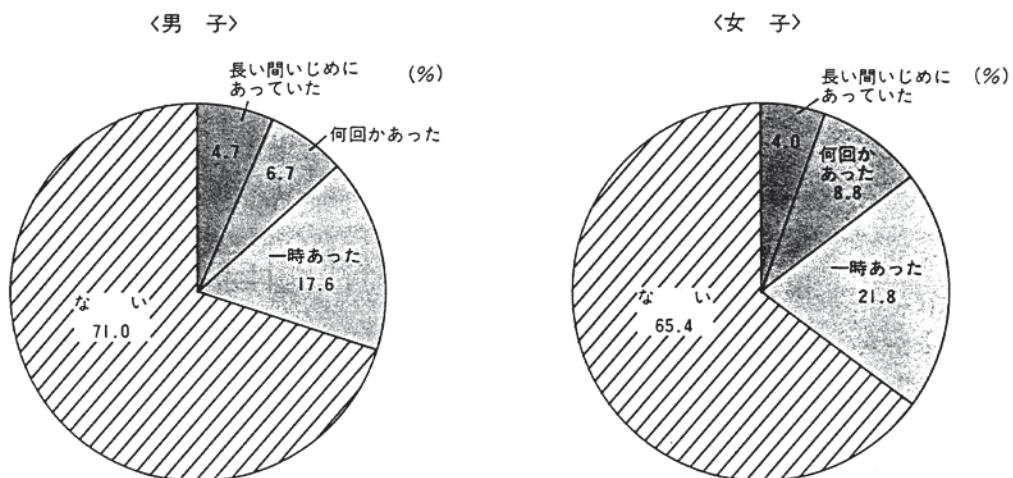
うに、2年生、3年生ともほぼ2割となっていて、意外に高い発生率を示している。とくに1年生は入学後2~3か月だが、すでに13%が、いじめの被害にあっている。この図で見る限り中学生の場合、とくに入学当初が「いじめ」にあいややすい時期ともいえそうだ。

また先にも見てきたように、「いじめ」には、学校差があって(表2 P.14参照)、個人的体験でも表5に示したように1割強から3割弱まで、多少の開きが見られる。

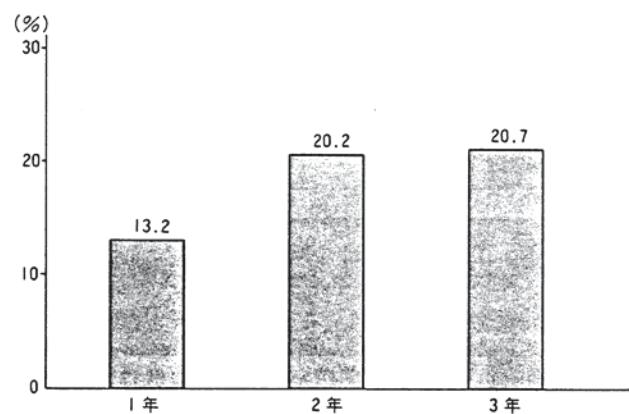
また中学生になっていじめられた者は、表6に示すように、小学生時代にもいじめられた体験をもつ者が男女とも圧倒的に多くなっている。第III章にも見いだされるように、いじめられやすいタイプというのが存在することがわかる。

ついでに「いじめ」の発生しやすい時期を見てみよう。表7が示すように、全体の7割近くは1学期(4~7月)に「いじめ」が開始されている。この点は小学生の場合と大きく違う。小学生の場合は、5割が2学期(9~12月)に起きている。小学生の「いじめ」は、クラス全体でゲーム的に行われるのが典型で、そのためにはクラスが集団として、ある程度のまとまりをもたなければならぬ。ところが中学生の「いじめ」は、一部のグループによる場合も多く、ときに、非行的色彩を帯びた行為の傾向も見られる。となるとクラスが集団としてまとまりを見せ、多少とも内部のメンバーに保護的機能を果たすようになる前の、集団として若い時期に発生しやすいのが中学生の場合とも考えられる。

(図10) 小学生時代のいじめられ体験



(図11) いじめられ体験の所有者
(中学生になってからの)



(表5) いじめられ体験の所有者 (学校別)

学 校	あ り	学 校	あ り
釧 路	26.0	仙台(B)	22.3
旭 川	12.7	東 京	15.8
札 幌	21.8	千 葉	12.4
仙台(A)	21.8	福 岡	11.4

(表6) いじめられ体験（小学生時代×中学生時代）

		小学生時代のいじめられ体験 (%)		
		長期間・何回も	一時	まったくない
小学生時代		中学生時代		
男 子	中学生にな ってのいじ められ体験 あり	27.5	33.1	39.4
	なし	7.1	14.3	78.6
		小学生時代のいじめられ体験 (%)		
		長期間・何回も	一時	まったくない
小学生時代		中学生時代		
女 子	中学生にな ってのいじ められ体験 あり	29.0	31.2	39.8
	なし	8.7	19.9	71.4

(表7) いじめが始まった時期

性別 時 期	男 子 (%)		女 子 (%)	
	4、5月	6、7月	8 月	9、10月
4、5月	47.4	21.1	68.5	39.3
6、7月				22.8
8 月	3.5		3.5	5.3
9、10月	16.6	3.5	20.1	16.7
11、12月				7.9
1、2、3月	7.9		7.9	8.0
				24.6
				8.0

2. いじめる者の正体

「いじめ」がどんな集団によって行われて
いるかは、先に現在のクラス内での「いじめ」
の状況を示す図4(P.16参照)で見てきた通り

である。ここではその点を、生徒たちの個人的
体験の中で見てみよう。

図12が示すように、ここでも同様に、ほと

んどのケースが「一部のグループ」によって行われている。男子の場合、「一部のグループ」によるケースが58%、「ある1人」によって行われているケース25%と合わせると、83%がこれに該当し、女子も同じく69%と9%で合わせて78%がこれにあてはまる。「全員でのいじめ」のケースが男子より女子に多少多い傾向も、先の図4の結果と一致している。

しかし、「いじめ」は、クラスの中でだけ起きるのではない。中学生ともなれば部活動をはじめとして、活動の場はクラスや学年を越えて大きく拡がっていく。図13によれば、全

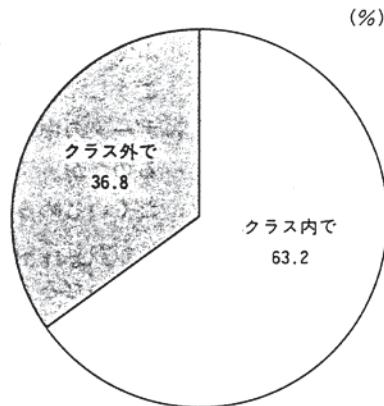
体のほぼ3分の1はクラスを越えた場で、「いじめ」が起きている。

そのクラス外での「いじめ」だが、図14が示すように、部活動での「いじめ」も2割程度はいるが、半分以上は同学年の生徒による「いじめ」であり、女子はとくに上級生をも含むグループで「いじめ」にあっている。こうしたクラス外での「いじめ」については、非行グループとの関連も含めて、さらに追及が必要であろう。また教師の目も一層とどきにくくなるので、生徒指導上からも十二分な配慮が必要だろう。

(図12) 誰からいじめられたか——クラス内で

	全員	男子全員	女子全員(0)	一部のグループ	ある1人	(%)
男 子	9.6	7.0		58.2		25.2
女 子	8.6	6.7	6.7		69.4	8.6

(図13) いじめの場



(図14) 誰からいじめられたか——クラス外で

	同学年の グループ	上級生を含む グループ	部活動	その他	(%)
男 子	52.7	9.5	21.6	16.2	
女 子	51.8	20.4	22.2	5.6	

3. 不合理ないじめの理由

「いじめ」のケースの中で、「いじめた子」と「いじめられた子」の間には、それまでにどんな人間関係があったのか。

図15が示すように、それまで「仲の悪かった子」からいじめられたケースは少数で、男子の22%、女子の14%にすぎない。男子の場合は54%がそれまで「ふつうのつきあいをしていた子」によっていじめられており、女子も44%がこのカテゴリーに入る。逆に「とても仲よし」だった子が、ある日突然いじめる側にまわったケースが、男子で24%、女子ではもっと多くて、42%にも達する。しかも表8が示すように、学年と共に「とても仲よし」だった子から、いじめられるケースがふえていく傾向も見いだされる。

また図16は、いじめられた原因についてである。男子で7割、女子でも6割近くが、これといって心当たりもないのに、突然いじめられるようになったと言っている。これも小学生の結果(74%)とほぼ一致している。(なお、いじめられた原因について学年別にみたのが表9である。)

考えてみれば、とくに仲が悪かったわけではないふつうの(ときには仲よしだった)友人から、ある日突然理由もなくいじめられる。いじめられる側にしてみれば、こんなにも理不尽で、こんなにもおそろしいことが他にあるだろうか。もっとも図の中に、13%だが相手の子とケンカして負けてからいじめられるようになったケースがある。また男子の16%、女子の29%は、自分が相手に何か悪いことをしてしまった(損害や危害を加えた)後で「いじめ」が始まっている。済んだことを後まで根にもっていじめつづけるというのは、男らしくない(?)行為とはいえそうだが、しかしこれらのケースは多少ともいじめられる側に非があるのだから、ある程度はがまんしなければならないともいえそうだ。優勝劣敗は世

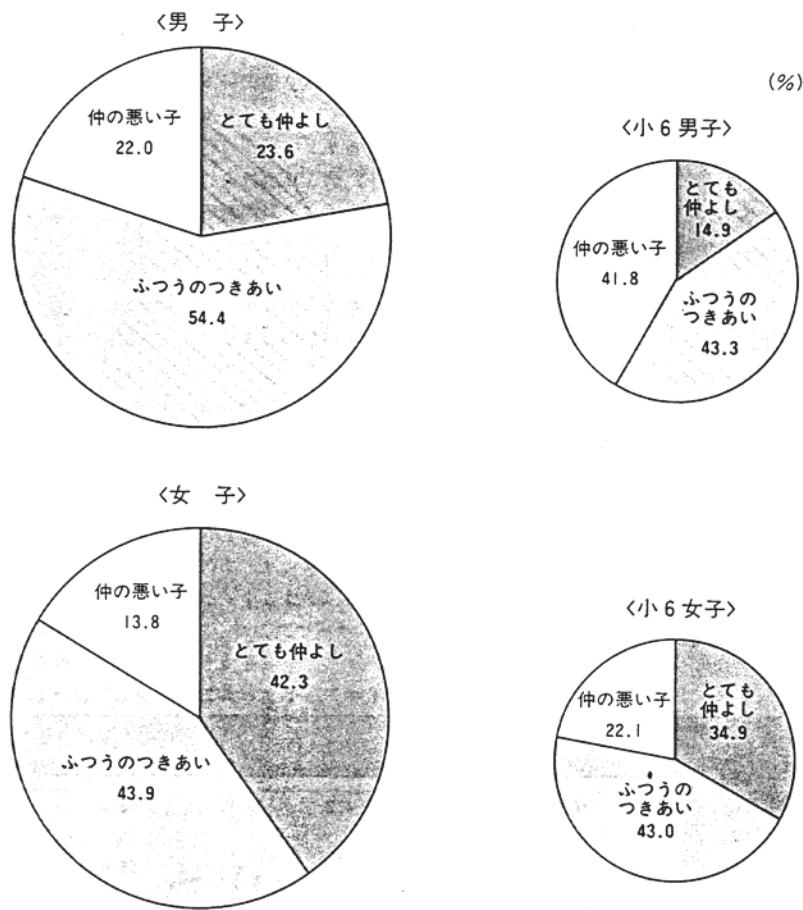
の常で、その結果を身にうけているのだと(百歩ゆずれば)考えることもできる。

しかし、「いじめ」の大部分はそうではない。自分に何の責任もないのに、「いじめ」の対象として、相手から一方的に選ばれてしまう様子が図に示されている。こんな割の合わないおそろしい話があるだろうか。

しかも、いじめる側の無責任さは、これらにとどまらない。理由もないどころか、こちらが正しいことをしていたのに、逆らみをして、いじめにかかる場合も多数ありそうだ。表10は、自由記述の中で本人がいじめにあった理由としてあげた内容である。「友人の悪い点を注意したら」「先生に正直に言ったらチクったと言われて」「悪いことに参加するのを断ったら」などの項目を見ていると、最近の子どもの世界に、正義やまじめさが、まったく通用しないものとなってきている気配に、改めてコワくなる。その他「転校生だったから」「部活動をやめたから」など、ごくふつうのことが、いじめの対象になっている。こうした不合理な理由による「いじめ」は、データの中では「理由もなく」に入ってはいるのだが、「いじめ」が手あたり次第、まったくいじめる側の都合によって手あたり次第に行われている状況を、何とかしなくてはならないだろう。こうした風土の中に身を置く生徒たちは、日々どんな思いで暮らしているのだろうか。

こうした「不合理ないじめ」は、学年と共に減ってはいく。巻末の集計表によれば、1年生で79%だったのが、2年生67%、3年生61%となり、3年生で理由のある「いじめ」がほぼ4割に達する。しかし、それでもまだ「納得のいく理由によるいじめ」のほうはずっと少ないのである。ここに「いじめ」とケンカとの違いがあるのでなかろうか。

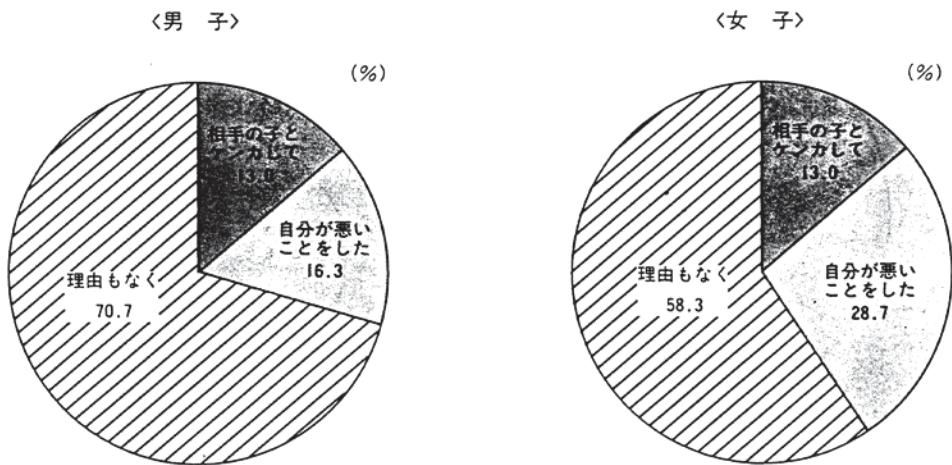
(図15) いじめた子とのそれまでの関係



(表8) いじめた子とのそれまでの関係×学年

学年	関係	とても仲よし	ふつうのつきあい	仲の悪い子
1 年		26.7	40.0	33.3
2 年	△	29.7	56.4	13.9
3 年	△	37.0	45.4	17.6

(図16) いじめられた原因



(表9) いじめられた原因×学年

原因 学年	ケンカして	悪いことをして	理由なく
1年	16.7	4.2	79.1
2年	7.8	25.6	66.6
3年	16.2	23.1	60.7

(表10) 自分がいじめられた理由

- T君の髪の毛が病気でぬけた。2年生女子が「なまはげ」と言ったので、僕が「そんなこと言うんじゃない」と言ったから。くやしい。仕返しがしたい（中1男子）
- お金のおごりすぎて、かえって4、5万円もとられた（中1男子）
- 何も理由がないのに、トイレで服をぬがされた（中2男子）
- 転校生だったから（中2男子）
- 1年生のとき、自分もいろいろ悪いことをして、目をつけられていたから。放課後や休み時間呼びだされて、おどされたり、けられたりした（中2男子）
- 何もしていないのに、休み時間になると来て、ビンタをしたり、けったりする（中2男子）
- 何もしていないのに、1人が悪口を言ったり、バカにしたりしたら、クラス皆がするようになった（中3男子）
- 金をかせと言われて断ったから（中3男子）
- 何もしていないのに、えり首をつかまれ、生意気と言われ、金を要求されたりした（中3男子）
- 私がわがままだったから（中1女子）
- 私が生意気そうに見え、目立っていたから。その人たちは不良グループ（中2女子）
- 男子の暗いグループから、言われるだけだけど、学校生活がみじめです。でも女子の友だちは「あんなの気にすんなね」など言ってくれるのでうれしい（中2女子）
- 自分は正しいことをしたのに、みんなにとっては、私がまじめぶっているように見えたのだろう。1人の中心的人物が声をかけて、やらせた（中2女子）
- 自分がしたことではないのに、カン違いされて、広場につれてゆかれ、ぶたれたりけられたり。先輩に言いつけたと非難された（中2女子）
- 友だちが先生におこられて、物に八つ当たりしてこわした。そのことについて「見た人」と言われたので、手をあげたから（中2女子）
- 部活動をやめて、他の部に入ったから（中3女子）
- その人が悪いことをしているのを見て注意した。先生に言った。チクリマンと言われ、いじめられた（中3女子）

4. どのようにいじめられたか

図17によれば、いじめられ方には多少の性差が見られる。男子と比較したとき、女子に少ない「いじめ」のパターンは、「暴力」がらみの「いじめ」である。「金品の要求」もそうである。「イジワル・イタズラ」もその傾向にある。逆に女子の「いじめ」で多いやり方は、「無視・仲間はずれ」で、こうした特徴は、小学生時代の「いじめ」ととてもよく似ている。

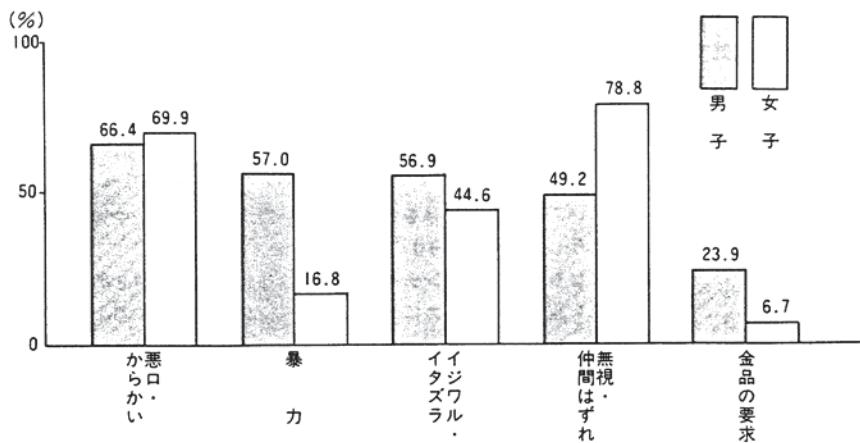
このように、男子の「いじめ」が多少とも非行的性格を帶びている点に、とくに注意が必要であろう。知恵もつき体も大きくなっている生徒たちの行為が、はざみで犯罪と名づけられるタイプの行為にふみ込んでしま

う可能性は、十分にあるといえそうだ。

なお調査票には、クラスでの「いじめ」と同じく、「どのようにいじめられたのですか」との自由記述欄を設けたが、ほとんどは無記入か、短い記入があるだけだった。その点では、クラスで起こっている他人の「いじめ」の欄のほうが、ずっと詳しい記入があったのが特徴的だった。「思い出したくもない」「言いたくない」「今さらおそい」という記入もあった。

しかし、なかでも特徴的なものを表10に理由とともに掲げておいたが、さすがに「金品の要求」や「暴力」「肉体的なはずかしめ」など、クラスメートにはわからないいじめら

(図17) いじめられ方



方が、記入されていた。彼らがその方法についてフランクに他人に語れるようになるの

は、「いじめ」が完全に終わってから、または心のキズがいえてからなのかもしれない。

5. 口をつぐむ被害者たち

さて「いじめ」の解消に手を焼くわけは、当事者がそれを他人に語らないため、「いじめ」が起こっている状況をつかみにくいくらいであるだろう。この点を見たのが、図18である。男子の場合、誰にも話さずに1人で耐えたケースは47%、これに対して女子は24%とこれも小学生の結果と同様、男子のほうがずっと寡黙である。女子の場合はある意味で、強さよりもしろ弱さのほうが「女らしい」として社会的に許容される。したがって「いじめ」にあっている「弱い自分」は、必ずしも恥ではなく、これを他に打ち明けやすいのだろう。しかし男子の場合、「弱い男の子」であることを語るのは、むずかしそうだ。男子が寡黙であるのはこのためだろう。

さて「いじめ」を打ち明けた相手だが、図19が示すように、親しい友人に打ち明けるケースが一番多くて、男子の5割、女子の8割にも及んでいる。この数字を見ていると、いじめが発見しにくいといわれるが、少なくと

も友人の口からでも担任や親に情報がもらされれば、事態はかなり好転すると思われる。しかし困ったことに最近の子どもたちは、それを「チクリ（つげ口する）」と称してもっとも忌み嫌う。表10の中に、「先生に言ったら、チクリマンと言われて、それ以後いじめられるようになった」「先生に“見た人”と言われて、手をあげたら、それ以後いじめが始まった」という記述があるのも、これを表している。子どもたち全員が知っているのに、誰一人おとなに打ち明けない。そうした場合の結局の固さは、大変なものである。

しかもそうした結局の固さを、子どもたちは、自分たちの世界における、ある種の「正義」として是認している気配もある。しかし、それがとんでもない間違いであることを、子どもたちに理解させなければならない。弱い者がいじめにあう。そのこと自体が子ども世界の恥であり、それを見て、見ぬふりをしていることは、一層人間として恥ずべき行為な

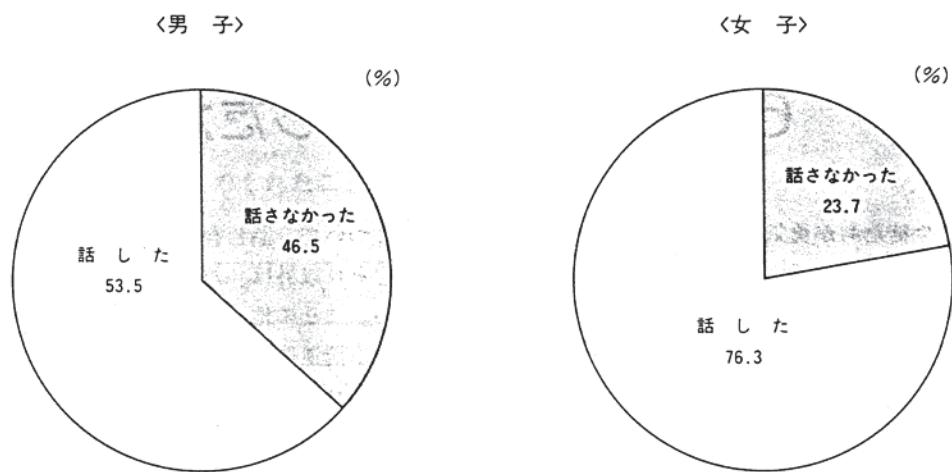
のだということを子どもたちにわからせること。それを教育のプログラムの中に組み込んでいかなければならぬだろう。

さて図18で見てきたように、誰にも「いじめ」を打ち明けなかった者は3分の1にも達するわけだが、担任のほうではそれをキャッチしていたのかどうか。生徒たちの推測によると、表11に示したように、1年生では64%、2年生では54%、3年生では50%が、「ぜつ

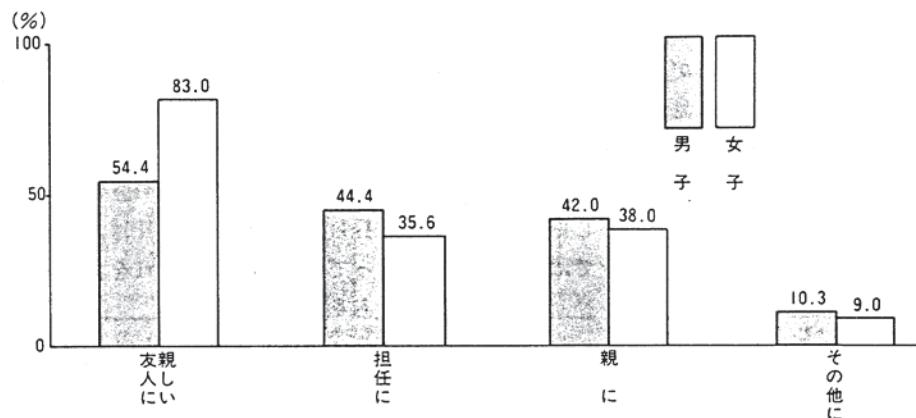
たい・たぶん担任は知らなかっただろう」と答えている。学年を追うにつれて、担任が把握できる可能性が増すものの、それでも3年生になっても半分の担任は「いじめ」を把握できていなかったと推測される。

小学生の「いじめ」でも、「担任はぜつたい・たぶん知らなかっただろう」とした者は、4年生で21%、5年生で18%、6年生で14%と、やはり減っていた。学年を追うにつれて、多

(図18) 誰かに話したか



(図19) 誰に打ち明けたか



(表11) 担任は知っていたか×学年

		(%)
1 年		63.8
2 年		54.0
3 年		50.0

(せつたい+たぶん知らなかった)

少とも把握しやすくなっていく傾向は変わらないものの、小学生に比べると暗数が大幅に

増加している点に、中学生の「いじめ」対策のむずかしさが表れているのだろう。

6. 周囲はどう対応したか

さて生徒たちが勇気を出して「いじめ」にあっていることを訴えたとき、担任や親や友人はどう対応したか。それを見ていくことにしよう。

図20が示すように、44%のケースでは、「担任は何もしてくれなかった（話を聞いてくれただけだった）」と答えられている。この中には、本当は担任が陰でいろいろ手をまわしてくれたのだが、それが本人にわからなかっただけ、というケースも含まれてはいるだろう。しかし44%の生徒たち当人にしてみれば、少なくとも「話しても担任は何もしてくれなかった」と感じているのである。やはりこれでは、生徒に対して十分な対応ができたとはいえないだろう。多少とも目に見える形の行為、つまり生徒に、「自分の置かれている立場を理解してくれて、それなりに援助しようとしてくれる人びと（担任）がある」と感じさせ、力づけるような行為が担任として必要ではなかろうか。

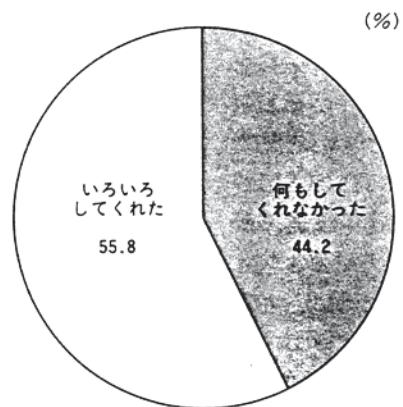
さて、残る56%の「いろいろしてくれた担任」だが、一体何をしてくれたのか。表12が示すように、6割はいじめている生徒たちに直接注意を与え、4割近くはクラスで「いじ

め」について、話し合いの時間をとっている。しかしそれ以外は、たいした方法もとられていない。「その他」の欄に○をつけたのは2割。自由記述欄にも、これといって特別な記入は見られなかった。いじめに対して担任が、直接注意を与える以外に、方法をもたない様子がよくわかる。また、6割を占める「直接の注意」にしても、これがかえって逆の効果を生むこともある。担任（とくに生徒たちからの信頼のうすい）が、どんなに長々と説教をしたところで、単なるコトバの操作では、たいしたききめがないのは誰しもよく知っている。おそらく担任自身も。しかし生徒指導上の力量がないと、そうしたコトバ以外に方法をもたないので、ついこれに頼ってしまうのだろう。

では生徒が担任に「いじめ」にあっていることを打ち明けたとき、担任はコトバの上で何と言ってくれたのか。それをまとめたのが、図21である。

「自分に同情し、はげましてくれた」が全体の約3割。図の中では多いほうだが、しかしこれは複数回答なのだから、100%のケースにあってもいい反応ではないだろうか。「い

(図20) 担任はどうしてくれたか

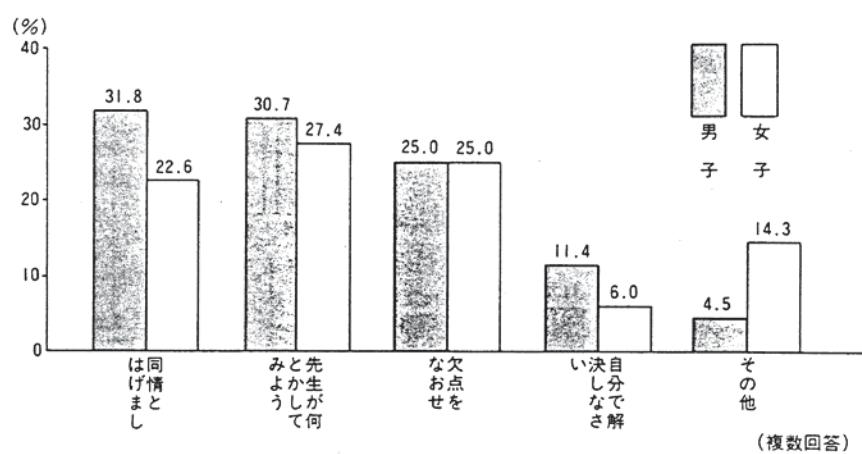


(表12) 担任のしてくれたこと

	(%)
いじめっ子に注意	60.6
クラスの話し合い	37.9
その他	20.5

(複数回答)

(図21) 担任のしてくれたこと



じめ」は担任や周囲の人びとが、援助に乗りだしたとしても、瞬時に終わるものではない。解消までには多少とも、またはかなりの日数がかかる。その間本人に精神的なサポートを与えつけなければならない。担任にせよ、その他の人びとにせよ、周囲がつらい状況に置かれている現在の自分を見守りはげましてくれるという自覚が、子どもを支え、また、その状況を切り開くための力や強さを生みだすのではなかろうか。のために、生徒への「支援」を意味する言葉を、すべての担任（周囲の人びと）に期待したいものである。

図21で次に多い反応は、「先生が何とかしてみよう」である。これも3割弱の担任が言っている。「いじめ」は先に指摘したように、「多数」または力をもつ「1人」が、1人の生徒を対象とするのが特徴だ。とすれば多くのケースは、本人自身に解決への力を期待することは、望みうすだ。そのことは、誰よりも本人が感じているだろう。こうした状況で、担任の「先生が何とかしてみよう」は、どんなに本人を力づけることだろう。

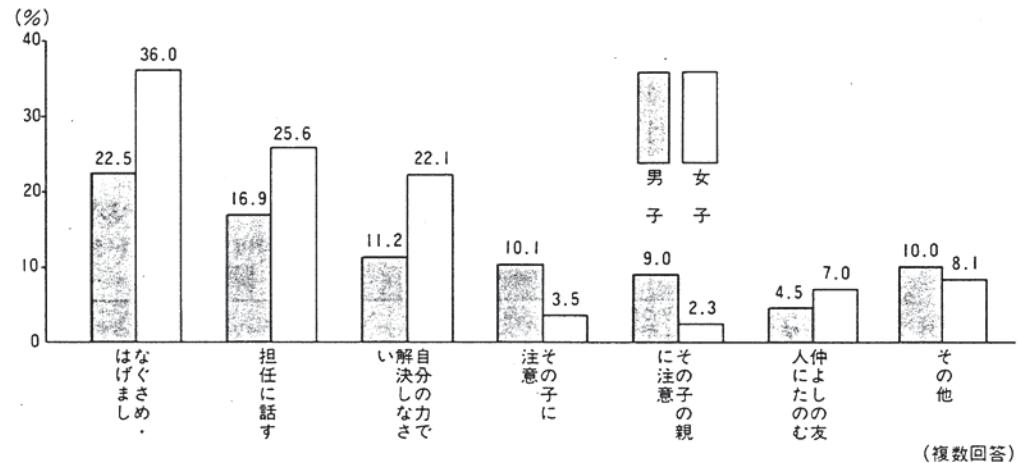
次に「あなたのほうにも欠点があるのだからなおしなさい」「自分の問題なのだから、自分で解決しなさい」がある。しかしこの2つの応答は、いじめを訴えている本人に対して、いちばんむごいものではなかろうか。

まず、「欠点をおしなさい」だが、後に見ていくように、たしかにいじめの対象にされる生徒には、「弱さ」を中心とした人格的な特徴がある。しかしそれはとくに他人に害を与えるようなもの、他から糾弾されるような性質のものではない。その欠点（特徴）があったからといって、当人が「いじめ」にあって仕方がないというものではない。「いじめ」に関しては、何といっても100%いじめる側が悪いのだ。

たとえグズであっても、気弱であっても、それは本人が好んでそうしているわけではない。親からの遺伝的要因もあろうし、生まれてから十数年の環境的要因の積み重ねもあるだろう。また本人が努力して克服しようとしながら、今なお克服しきれていない部分もあるだろう。

また「生意気だ、出しやばりだ、気にさわる」などの理由で行われる「いじめ」は、自分と違う特色をもったり、違う立場をとる相手を排除しようとする行為で、ファッショのものの行為である。とすれば当人たちに「強くなるように」「欠点をおおすように」「皆に気に入られるように行動するように」「他と同調するように」と説くことが、どんなに不合理で危険な思想か、おとなたちは考えてみたことがあるだろうか。

(図22) 両親のしてくれたこと



むろん「自分の問題だから、子どもの間の問題なのだから、自分たちで解決しなさい」は、おとなとしての責任の回避であり、「いじめ」とケンカの区別もできない最低の対応のしかたではなかろうか。

後にも述べるように、「いじめ」解消のカギを握るのは、何といっても周囲のおとなたちであり、とくに「教師」や「学校」であろう。「いじめ」が子どもの世界に深く静かに潜行する解決のむずかしい問題であるからこそ、逆に教育の専門家としての力量の程がためされるのではなかろうか。

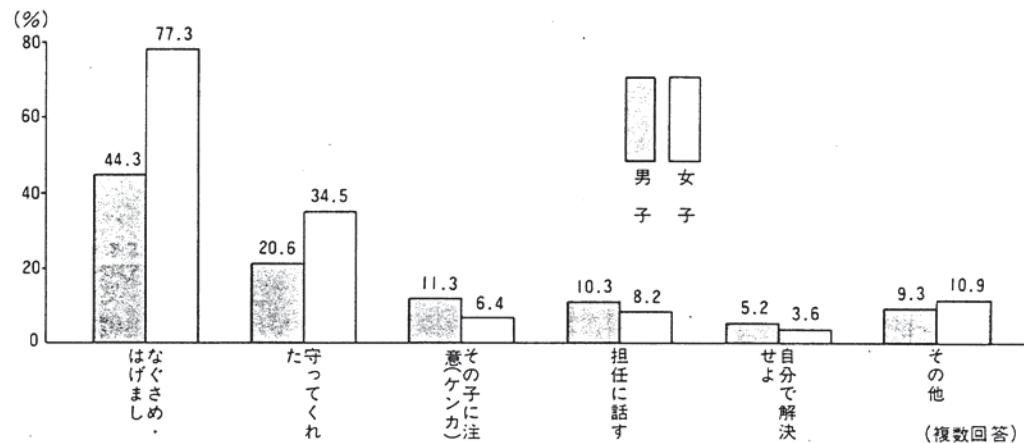
さて次は、図22に示したように、いじめを打ち明けられた後で、両親のした対応である。なかでも注目されるのは、「担任に相談」にいった親が、男子の親で17%、女子の親で26%という意外に低い数字であることだ。58年10月に、千葉県の中学生の母親対象に筆者が行った調査では、小学生時代の「いじめ」を、その当時担任に相談した母親は、男子で4割、女子で2割であった。図22は、生徒たちの把握のしかただから、多少全体に数値は低くなっているかもしれないが、それにしても中学生という年齢を考えると、両親がどう行動したかはだいたい把握できていると見てさしつかえないだろう。すると、小学生の「いじめ」には、まだ親の出る幕がありそうで親た

ちも動くが、中学生になると親たちも手をこまねいて見守る以外には方法がなくなるのかかもしれない。それでも中には勇ましい親たち、行動的な親たちもいて、そのいじめっ子に直接注意した（男子10%、女子4%）、その子の親に話した（男子9%、女子2%）なども見られるし、仲よしの友人に（いじめをやめさせるよう）頼んだなどの反応も見いだされる。

次は友人の対応（図23）である。友人の対応は、担任や親の反応よりずっと率直だ。「なぐさめ・はげまし」が男子の44%、女子の77%にも達する。担任や親の側にも、このくらいの数字は欲しいところである。「自分で解決しなさい」はさすがに少ない。かわって目をひくのは、「自分を守ってくれた」で、男子の21%、女子の35%のケースに見いだされる。

ただし欲をいえば、この数字は、なぐさめたり、はげましたり、と同じくらいを期待したいところだ。最近の「いじめ」が昔の「いじめ」と比べて、質的にも量的にもエスカレートしてきている原因は、子どもの間に適切な「仲介役」「助っ人」がいなくなってきたいるせいだとともいわれている。昔の子どもたちは、ケンカをトラブルの決着方法の一つとして容認し、当事者たちをある程度したいようにさせておいたものだが、それでも勝敗が

(図23) 友人のしてくれたこと



7対3か、8対2くらいで明らかになると、「まあまあそこまで」と分けて入ったものだった。または、弱いものいじめに対しては、頼まれもしないのに助っ人にまわるような、バランスのとり方をしたといわれる。しかし、現代っ子たちは、どういうわけかそうした義侠心めいたものを身につけておらず、火中の栗は拾わなくなってしまった。このことは図

23の「その子に注意したり、その子とケンカしてくれた」が低い数値を示している点にも表れている。

いわば、他人の運命に無関心な現代っ子たちの増加が、最近のように「いじめ」を燎原の火と燃え盛らせる土壤の一部ともなっている点を、指摘する人びとも多い。

7. なすすべもなく時は流れて

こうした「いじめ」もいつかは終わる。その終わった原因は何か。何が「いじめ」の解消に貢献したか。その点を生徒たちにたずねたのが図24である。

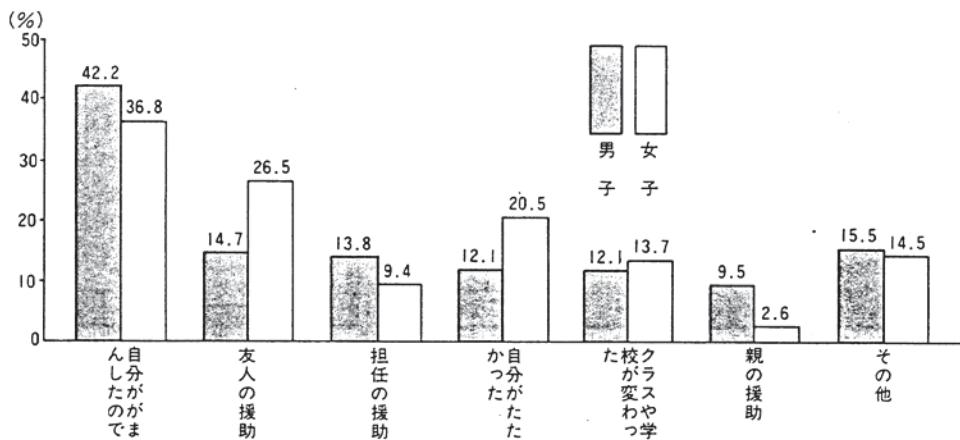
まず一番目につくのは、「自分ががまんしたので」の男子42%、女子37%の数字である。これは換言すれば、「なすすべがなかった」「相手があきるまでなすがままにした」という意味だ。これに「クラスや学校が変わった」の男子12%、女子14%を加えると、「なすすべもなく、時の経過にゆだねた」ケースが圧倒的に多かったことになる。こんなことでいいのだろうか。「いじめ」という生徒たちの基本的人権が侵害された状態に対して、周囲のおとなたちは何をさておいてもその都度徹底的に対応し、本人を守ってやらなければな

らないはずである。

次に続くのは、周囲の人びとの援助だ。わずかだが友人>担任>親という量的な関係が見いだされる。子どもが成長すればするほど、親の出る幕がなくなるのは当然だとしても、「担任の援助」の数字はもっと大きくていいのではなかろうか。また「友人の援助」による解決が、意外に大きい割合を占めている点にも、注目したい。「いじめ」を成長させないような土壤が、生徒たちの間にどうしても必要だ。その土壤を育てるこそが、教師たちに与えられた責務であり、社会的によせられている期待であろう。

また、「自分が勇気を出してたたかったので」も男子で12%、女子で21%のケースに見いだされる。「いじめ」が何らかの意味で、

(図24) いじめがなぜ終わったか



本人の「弱さ」をベースにして起きることは、後の章でも明らかにしてゆきたいが、といって、本人に「一挙に強くなること」を期待するのはむずかしい。ここで勇気を出して相手に立ち向かえるくらいなら、はじめから「いじめ」の対象として選ばれはしなかったであろ

う。ここに表れた2割弱の生徒たちは、いわばそれができた少数例であって、全てのケースにそれを期待してはならないだろう。「いじめ」解消には、他からの何らかの援助が、どうしても必要なのである。

8. あとに何が残ったか

さてその「いじめ」が終わった後で、何が生徒の中に残ったか。人生における多くの苦労や困難は、たいていの場合、人を成長させ思い出の中で美化されることもある、肯定されるものだが、「いじめ」の場合はどうか。

表13が示すように、筆頭にあげられているのは、「心の中にキズが残った」で、半数を超える生徒たちが肯定している。そのためには「性格が暗くなった」ほどの痕は残さないにせよ、「友人不信におち入った（友人がこわくなかった）」と答えている者も、男子で38%、女子で40%もいる。「思い出すだけでもゾッとする」とした者も、同じく3分の1に達する。むろん表中には「たくましくなった」「よ

い経験になった」とする反応も、かなりの割合で見いだされるが、過ぎ去った昔を美化し、苦しかった思い出を成長の糧と考えたがる人間のメンタリティを考えると、これはむしろ低すぎる数字とみなさなければならないだろう。すなわち「いじめは（決して）自分をたくましく成長させなかった」が5割、「いじめがよい経験とならなかった」者が、6割近くもいると読みとったほうがよさそうである。

しかも次の表14が示すように、これらの心のキズを示す反応は、学年と共に増加の傾向を示す。ふつうは、一年毎に人間は少しづつ成長する。強さもたくましさも増して、過去の苦難を美化することも、ポジティブに受け

(表13) いじめられ体験の意味

項 目	性 別 (%)	
	男 子	女 子
1. 心の中にキズが残った	50.0 <	61.6
2. たくましくなった	45.0 <	53.2
3. よい経験になった	38.0 <	48.4
4. 友人がこわくなかった(友人不信感)	38.3	39.9
5. 思い出すだけでもゾッとする	31.9 <	41.8
6. 性格が暗くなった	25.6	24.2

(とても+少しそう思う)

(表14) いじめ体験の意味×学年

項目		(%)		
学年		思い出すだけでもゾッとする	よい経験になった	心の中にキズが残った
1年		23.5 △	54.3 ▽	48.6 △
2年		31.5 △	48.4 ▽	52.6 △
3年		45.2	35.7	60.9

(とても+少しそう思う)

とめることも、可能となるはずだ。そう考えると、「心の中にキズが残った」も「思い出すだけでもゾッとする」の数字も減少してよいはずだし、「よい経験になった」も増して

よいはずである。ところがそれぞれの数字が逆の推移を示していることは、いかに「いじめ」が放置してはならない行為かを示すものといえるだろう。